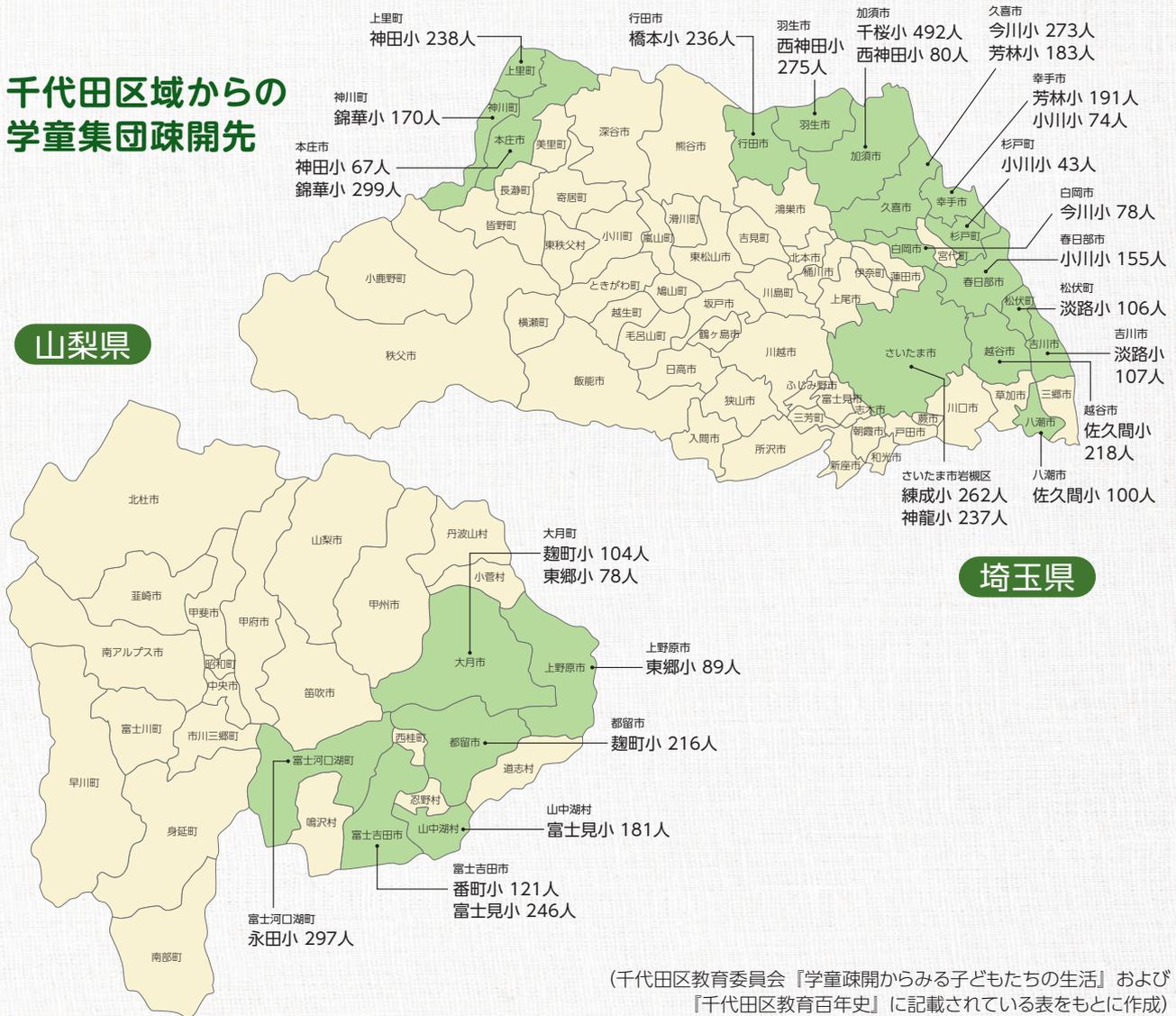


戦時下の子供たちは、どのような暮らしをしていたのでしょうか。
現存する数少ない写真を見ると、そこには食料に乏しくても、遊び道具はなくても、
たくましく育ち、学び、生き抜いている姿がありました。

千代田区域からの 学童集団疎開先



(千代田区教育委員会『学童疎開からみる子どもたちの生活』および『千代田区教育百年史』に記載されている表をもとに作成)

集団疎開が始まる

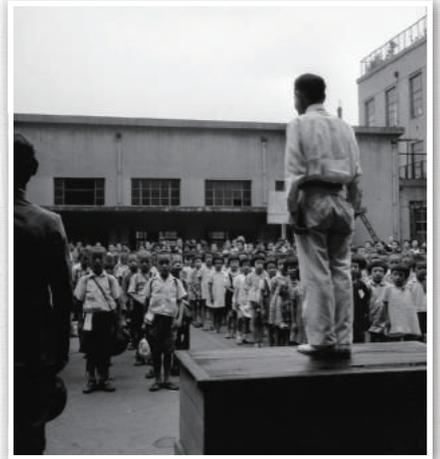
戦況の悪化で日本本土への空襲が懸念される中、昭和18(1943)年12月に都市の住民や建物を分散させる「都市疎開実施要綱」が決定されました。これによって、老人や幼児・学童を地方の親類などに預ける縁故疎開が進められましたが、実害がなかった時期ということもあり、あまり実践されませんでした。しかし戦況が悪化してきた昭和19(1944)年3月、いよいよ本格的に児童を都市から疎開させる「一般疎開促進要綱」が定められ、東京都では小学3年生から6年生にあたる児童を対象に、集団疎開させることとなりました。

千代田区の前身である麴町区と神田区のうち、麴町区は山梨県東部に、神田区は埼玉県東部に疎開先として割り与えられました。各学校は、地元と直接交渉して、学寮となる寺院や旅館などの施設を決めていきました。

一方、中学生以上の生徒は学徒勤労動員に駆り出され、軍需工場や食料生産の現場で働く労働力として、勤労奉仕に従事しました。



疎開学寮にて登校準備
(芳林国民学校=昭和館提供)



疎開地へ出発前の壮行会
(芳林国民学校=昭和館提供)

親元を離れて



防空頭巾をかぶっての授業
(麹町国民学校=千代田区教育委員会所蔵)

厳しい環境の中でもたくましく



疎開学寮の聖福寺にて相撲を取る6年生
(芳林国民学校=昭和館提供)

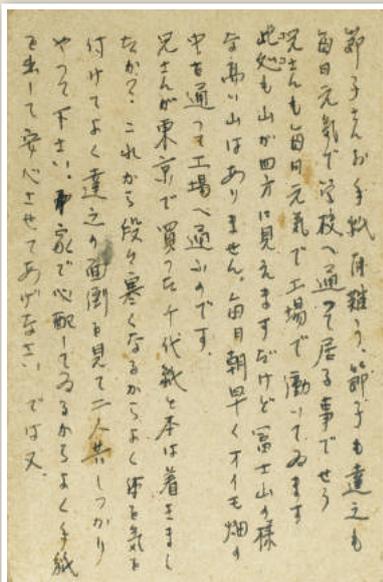


聖福寺の本堂での食事
(芳林国民学校=昭和館提供)

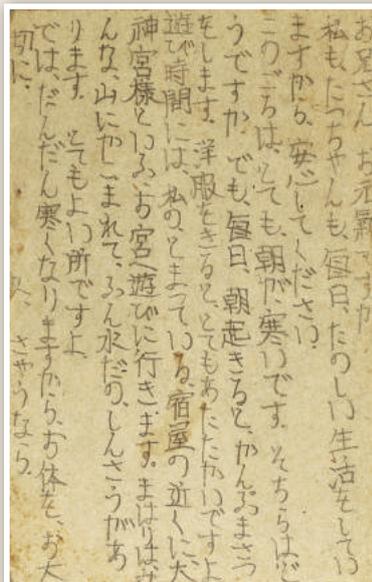


権現堂碑の前で遊ぶ
(芳林国民学校=昭和館提供)

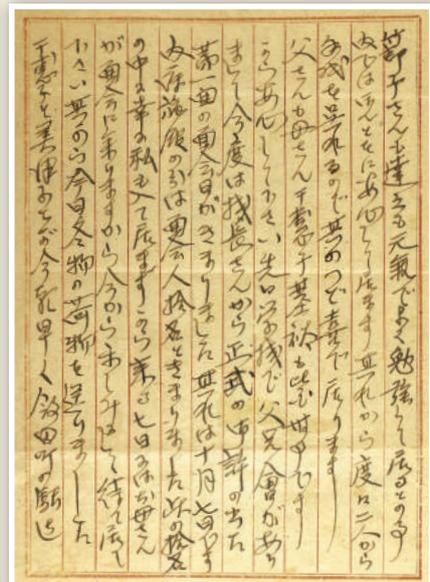
家族間の手紙 (麹町国民学校=千代田区教育委員会所蔵)



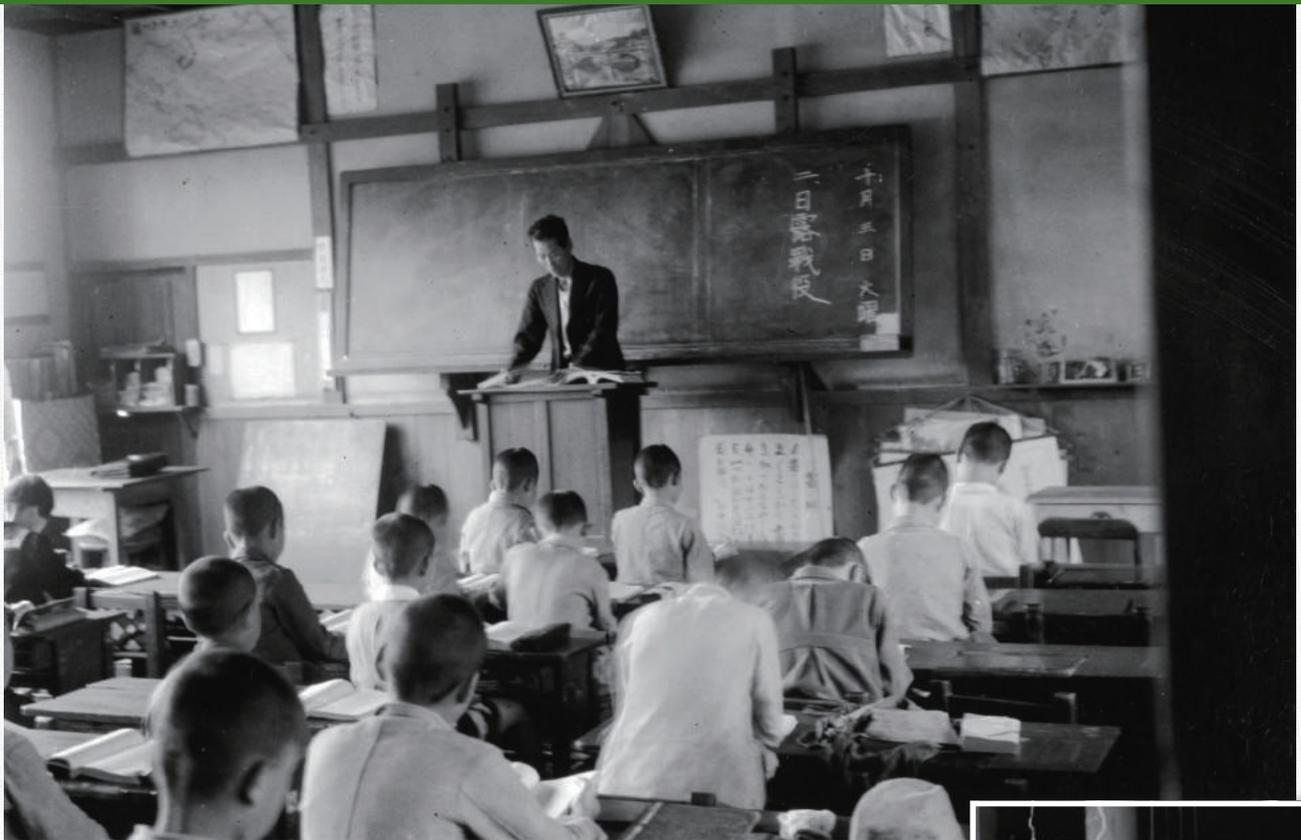
愛知県で勤労奉仕している兄から、疎開先の妹たちへ送ったはがき。いろいろな心配は尽きない。



疎開先の妹から、愛知県で勤労奉仕に出掛けている兄への手紙。毎朝乾布摩擦していることや、近所の神社での遊びについて書かれている。



父親から疎開先の娘宛の書簡。疎開から少したった頃の手紙で、面会のこと、冬物を送ったことが書かれている。



疎開先である幸手国民学校での授業風景
(芳林国民学校=昭和館提供)



栗橋町の松ノ湯前での集合写真
(芳林国民学校=昭和館提供)



聖福寺の本堂で勉強をする3年生
(芳林国民学校=昭和館提供)

終戦を迎え、 郷里へ

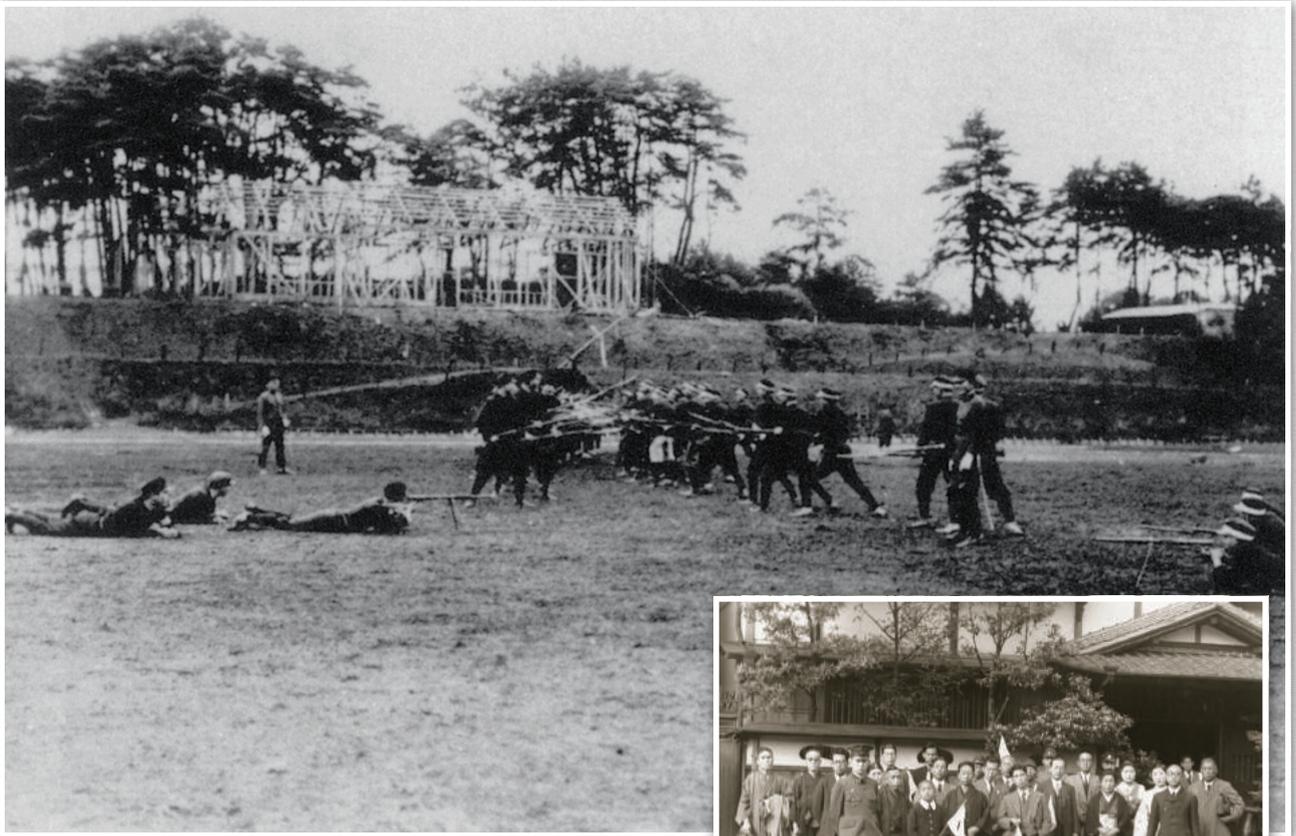
帰京のため、疎開先を引き揚げる児童たち
(芳林国民学校=昭和館提供)



戦争に^{ほん}翻^{ろう}弄された学生たち

〈男子学生編〉

太平洋戦争末期には、兵役につく年齢が18歳に引き下げられました。学業に勤しむはずだった時間は戦争のために充てられ、学ぶ機会を取り上げられた男子学生たちは次々に戦場へと送られていきました。



武装して行う実践的な「軍事教練」は大学の必修科目だった
(明治大学史資料センター所蔵)



陸軍の「教育召集」前に、小川町3丁目の
旧昇龍館本店前で
(神田公園地区連合町会ホームページ「大好き神田」所蔵)



昭和19年頃には、中学生でさえ軍需工場の
深夜労働を強いられた
(毎日新聞社)



昭和18年10月、神宮外苑での「出陣
学徒壮行式」で行進をする大学生たち
(毎日新聞社)

〈女子学生編〉

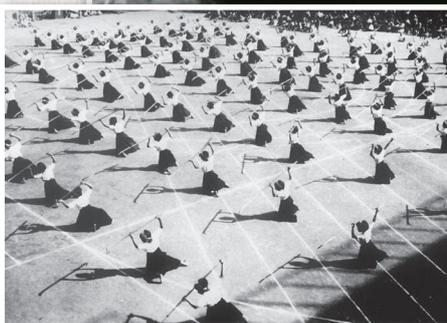
授業のひとつとしてなぎなたや救護・看護訓練が行われていました。昭和19年には「学徒勤労動員」が閣議決定され、12歳以上のすべての生徒が工場で働くこととなり、女子も軍需工場での兵器製造や力仕事にあたりました。



担架を使った女子学生による救護訓練の様子
(明治大学史資料センター所蔵)



新宿駅で貨物整理に励む女子挺身隊
(毎日新聞社)



昭和14年、運動会でのなぎなた演技
(麹町小学校所蔵)

山川製薬において、勤労奉仕に励む女学生たち
(共立女子学園所蔵)